

疑惑の限界というものがある：我々はどこまでウソと付き 合わされるのか？

この世界は今どうなっているのか？

Greatchain

2020/04/27

我々はウソをつくだけならまだよい。ウソをつかない者たちを、自分たちへの反逆者と思
い違いして、殺すかもしれない。「まさか」という人があるあるだろう。しかしそれは、日
本でもアメリカでも、どこでも十分にありうる。間違いなくその雰囲気が漂っている。
GeoengineeringWatch の Dane Wigington 氏ほど、人類が感謝し尊敬すべき Whistleblower
(警告者) はいないであろう。しかし、彼に対するこの恐るべき無関心を考えると、彼へ
真逆の敵意が煽られ信じられることも、十分考えられ、ゾッとする。

正当な疑惑というものが禁じられている。たとえばビル・ゲイツ氏に対する犯罪疑惑は、
これまでの経緯や世論から、十分に立証されていると思われる。その場合、敬語を用いて
はっきりその疑惑を口にすることは、公的なニュースでも許され、むしろ奨励されるべき
である。これは、罵ったり敵意を表したりすることではない。これを禁じる、あるいは無
言を強要するのは、極めて不当で、反社会的(犯罪的)な所業である。さらに言えば、今、
不信感を抱かれている NIH 所長 Anthony Fauci (ファウチ) 氏についても、疑わしきは論
ぜよの原則があつてよい。疑いがあれば、あると、ニュースで言うべきだ。間違ったら謝
ればよい。その一事によって、どれほどこの暗い世界が、一気に明るくなるかしのれない。

「そんなことがあるはずがない」と、大多数の人々が夢にも信じないようなことが、医療
の世界などでも起こっている。例えば、「医療倫理など要らぬ、医者に良心など要らぬ」と
堂々と主張する医者 of 権力者がいて、これが通用している。エゼキエル・イマヌエル(発
音は違うかもしれない)という医師がその象徴的な存在である。これは何を意味するか？
何と、誰と——また、どんな不吉なものをつながっているか、想像するがよい。これは私
自身が最近の入院で体験したことでもある。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/191222.pdf>

また、現在起こっているコロナウィルスの蔓延は、自然に発生したものか、実験室で故意
に発生させたものかを、一般には、問わないようにしている。これはこれで賢明なことで

ある。これを誰かの罪にして事がおさまるものではなく、そんな詮索をしている時でもないからである。

しかし、より深く今後のことまで考えたとき、コロナウイルス作戦のみならず、細菌兵器、生物兵器、化学兵器などによる作戦は、現実には当然のように存在する。それを教えよと要求されたら、我々はその恐ろしい事実を勉強し、知識を共有しなければならない。特にどこの国（あるいは偽装国家）にその悪魔性が顕著であるかについても、ウィギントンの警告する気象兵器の、信じられない恐ろしさや狂気とともに、知っておかねばならない。それは原爆の理解ともつながっている。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/200321.pdf>

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/200303.pdf>

同様のことは、「ペドフィリア」の現実についても言える。これを一般の人々に、当然のような教え方をすることは、社会常識から憚られる。それはあまりにも狂気じみて恐ろしい世界だからである。しかし教えよと要求されれば、その真実を教えなければならない。適当にごまかして虚偽を教えることは許されない。なぜか？ それは我々に責任があるからである。co-creationという言葉がある通り、**我々は神の創造に対する、共同の責任を負わされている**からである。

ところで、David Wilcock の情報について、このところずっとインターネットのトップに出ている、Jenny McCarthy's "Out of This World" Interview という記事がある。これは Wilcock と Corey Goode の兩人に対し、聡明でウィットナーな女性司会者ジェニーが、打てば響くような問答をする小気味のよい鼎談で、私はこれを類いまれな作品と考えている。これは、字幕はあっても、聞き取るのが極めて難しく、早口であるにもかかわらず、これほどうまくいった討論はないと思える。この 2 人の完全な信頼関係に対し、「アンビリーバブル」と言いながらも、この超次元・超 density の世界と、その Disclosure の内容を、これほどの的確に理解する女性は、ちょっと見当たらないだろう。

そしてこれは「この世界は今どうなっているの？」という質問に対し、まさに時宜を得た答えを提供している。ここには、我々が日常接している、「奥歯にももの挟まった」タブーや、ごまかしや、頑迷の世界を完全に払拭する、気持ちのよい世界が展開されている。アンビリーバブルだが、彼らの話し方からして、彼らがウソをついているとは考えられない。

私は自分の無能をも顧みず、これを要約的にでも、訳せないかと考えた。しかし、私の老齢のせいもあり、これを、この論文の「ついで」に扱うわけにはいかないことがわかった。そこで、とりあえずこれは諦めることにする。我が国には、英語力も内容の理解力も、舌

を巻くほどの方々が、いくらでもおられることを私は知っている。どうかそのような方々に、この鼎談のようなすぐれた文献を、翻訳紹介していただきたいものである。